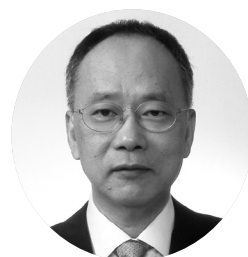


## 学校医の役割・意義とその変化



みなみクリニック 南 武嗣  
(鹿児島県小児科医会 会長)

### 学校での健康診断と保健委員会

学校医は少なくとも年に1回は健康診断に学校を訪れ、年に2回は保健委員会で保護者や教職員と話し合いを持ちます。健診では先天性心疾患の多くは就学前に診断がつき治療されている症例が多くなりました。ただ心雑音の少ない心房中核欠損症は心電図で不完全右脚ブロックを認め、また突然死につながるQT延長症候群も重要ですので、健診だけでなく心電図検査にも注意が必要です。歯科のう歯の問題とアトピー性皮膚炎の放置など気になる例があります。子どもの世界の2極化が心配されます。

数年前に始まった運動器検診ですが意外と異常が多く驚いています。姿勢が悪くまっすぐ立てない、側弯がある、関節が硬くしゃがみこみができない、片足立ちができないなど昔の小学生では考えられない子どもさんを見かけます。運動不足やゲームへの依存が心配されます。一方、小学高学年から中・高校生では逆にスポーツの練習の過多による障害もみられ、ここでも2極化が心配されます。

### 心の問題、命の授業

学校保健の最近の問題として心の問題があります。以前からあった不登校の問題、最近注目の、自閉症スペクトラム、注意欠陥多動障害や読字障害などの発達障害の問題、ゲームやパソコンなどへの依存、引きこもりの問題とその割合が増

えているのが現状です。就学前後から小学3～4年までの小さなつまづきが、小学5～6年、中学生になると自己評価の低下や引きこもりなどに発展し本人も保護者も困っています。経過の良い子どもさんでは、様々な支援が噛み合い、本人も納得しながら学校や社会になじんで行くようです。早期からの支援が鍵と考えられます。

命の授業と性教育がもう一つの課題です。仙台市の川村和久先生の取り組みがユニークです。全国学校保健・学校医大会の一貫として鹿児島県でも10月25日(木)に教職員向けに講演をされます。講演は①小学校4年生向けの命の授業、赤ちゃんや命がどこからくるのか、自分たちがどこからきたのかの話をし、未熟児の子どもさんが多くの人の手助けで大きくなる話と、②保護者向けの未成年の妊娠で不幸な経過をとった深刻な話をし、日頃からこの問題に子どもとのコミュニケーションを取りましようという2部の構成になっています。2011年に「子ども子育て支援功労者」として内閣府特命大臣表彰を受賞し、内容は内外教育2018年1月16日に掲載されています。ご一読をお勧めします。